

木脇家は、もとは日向国の伊東氏の一族であり、のちに島津氏に仕えた。島津家の中でも古い格式を持つ家柄で家格は小番（他藩の馬廻に相当）であった。

17世紀後期の祐之の代に城下の中心部にあった屋敷を売却し、城下から離れた唐湊の別邸を本邸とした。

啓四郎の父仁平次祐長は、天明5年（1785）に木脇家の分家を立てることを許され、文化13年（1816）、沖永良部見聞役として同島に下った。啓四郎は、文化14年2月23日に仁平次と島妻の米松との間にできた子供であった。ところが、啓四郎2歳の文化15年2月4日、仁平次は癌にかかり病死する。死を覚悟した仁平次は親類宛に詳細な遺言書を残し病死する。啓四郎は少年期を沖永良部島で過ごす。

この間の事情について啓四郎は、その一代記である『萬留』の中で、幼少期のことを印象深く回想している。

啓四郎の尚古趣味や、南朝勳員などは時代の影響もあるが、父仁平次に由来するものであった。

鹿児島登り・御数寄屋茶道・花道師範

啓四郎は8歳の時に仲仁という人物に連れられて、鹿児島に登り、唐湊の木脇本家に入る。10歳になると上荒田郷中で、薩摩藩の独特の地域教育を受ける。本家には後継ぎとなる男子がなかったので、将来、啓四郎と娘のかねを結婚させて本家を継がせる予定であったらしい。ところが、文政13年（1830）に本家に長男祐治が誕生したため、啓四郎は鹿児島城に茶坊主として出仕することになる。啓四郎は、技芸を磨き、

木脇啓四郎の生涯

多くの薩摩藩士との人脈を築き、多彩な業績を残す基礎を得たといってもよい。

啓四郎は、松山隆阿^{まつやま りゅうあみ}弥に池坊流の花道を学び免許皆伝をし、鹿児島の花頭（師範）となった。また、甲冑製作を法元六左衛門に学んだ。また、若いころ、四条派の絵師でもあった税所龍右衛門篤之に絵を学んでいる。絵を学んだことは、花道の技を習得するのに大いに役に立ったという。

甲冑製作・藩版

天保14年（1843）に初めて公用で京都、江戸へ赴く。薩摩藩では当時調所^{すしよ ひろきと}広郷により藩の財政立て直しが、幕府では老中水野忠邦による天保の改革が行われている頃であった。6年間の江戸詰で、啓四郎は専門家について甲冑^{えびはら きよひろ}製作法を学ぶよう調書の側近の海老原清熙から命を受け、習得^{くりはら のぶみつ}に励んだ。また、幕臣の有職故実家、栗原信充

（柳庵）に弟子入りをした。弘化4年頃江戸詰を終え鹿児島にもどり、甲冑製作所の主取（責任者）として種々の古式に則った甲冑を製造した。その傍ら、啓四郎は古い時代の甲冑などの武具の蒐集を行うとともに研究にも取り組んだ。

また、安政年間には島津斉彬の命で、島津領国の武器調査に従事、慶応年間には島津久光の命で、栗原信充著『軍防令講義』『職原鈔私記』や「天の逆鉾図」などの編集、出版に関わる。

明治維新後の啓四郎

明治維新間近の慶応3年（1867）、啓四郎は突然郡奉行に任じられる。その後は、長島や北薩摩、明治維新後には指宿・穎娃^{いぶすき え}・山川^{やまがわ}、甕島^{こしきじま}を担当する地方官を歴任す

る。一方、明治4年～6年にかけて、明治政府の博覧会御用を務め、産物調査などに従事する。また、明治8年（1875）には島津家の事業を引き継いだ苗代川陶器会社の次長として陶器の販路開拓のため上海に赴いた。

明治10年（1877）には西南戦争が起こる。薩摩は薩軍と政府軍に分かれて相まみえ、鹿児島は精神的にも物理的にも大きな痛手を蒙った。啓四郎は当時、小林郷（宮崎県小林市）の副区長であったが、息子の藤次郎（祐充）が薩軍に従軍し、大いに気を揉むことになる（長男の弥太郎祐信は明治7年に死去）。西南戦争後は、藤次郎が学んできた茶の製造法に基づき一家を挙げて茶の生産に従事、自ら、興業の実践を行ったのである。

明治10年代には、鹿児島県の勧業課の出版事業、明治19～24年にかけては、沖縄県の勧業課の事業に関与する。明治の啓四郎は、日本の近代化、殖産興業政策とともに歩んだといえよう。隠居後も精力は衰えず、景観の復元、文化財の複製製作、鉱泉の発見など鹿児島のために努力し続けた。



四条派の絵師税所文豹と啓四郎

啓四郎の絵の師は税所文豹（？～1852）である（『萬留』）。文豹は名を篤之、龍右衛門と称した。詳しい経歴は不明ながら、調所改革時に京都詰役金方・見聞役を務めていた。妻は後に歌人として活躍する税所敦子である。啓四郎がいつ文豹に入門したのかは不明であるが、このほど木脇家文書の中に文豹が啓四郎に送った新年の挨拶状（本展覧会に展示）が見つかり、二人の子弟関係成立時期をある程度絞ることができるようになった。

年紀未記載の本書簡は、内容から啓四郎が江戸に下った弘化元年（1844）のもの、従って、彼らの出会いは啓四郎が天保14年（1843）に初めて訪れた京都、あるいはそれ以前の薩摩の地においてと推定される。内容は古画の修業のことや、茶器の写生は合作や席画に役立つといったもので、啓四郎に「隅田川邊、上野邊、しのばすの池など」を写生することを勧めている。

文豹は四条派の松村景文（1779～1843）門人である。円山応挙の写生画から派生した四条派は粉本だけに頼らぬ実地の写生を重んじる。特定の場所を描くようにという指導は四条派の絵師らしいものといえよう。四条派から学んだ対象観察の姿勢は、後の武具や植物、魚介類、そして風景を写実的に描く啓四郎の絵画制作に活かされたと考えられる。



甲冑製作

啓四郎は若いころから、^{ほうが}法元六左衛門から甲冑製作の技法を学んでいた（『萬留』）。啓四郎が初めて江戸の藩邸に詰めることになったのは天保14年（1843）であった。それはちょうど、老中水野忠邦による天保の改革が行われるとともに、アヘン戦争の情報がもたらされ俄かに軍備の充実が喫緊の課題となっていた頃である。家老の調所広郷の側近であった^{えは}海老原清熙が、啓四郎を呼び寄せ、「外国船の侵入に備えて武器、火薬、兵糧の準備をしたが、甲冑の製造については未だ手配ができていない、そこで江戸の故実家に学び、習得後は鹿児島で製造にあたるように」と命じた。これにより、啓四郎は甲冑師の^{みょうちん}明珍家に通い、また有職故実を幕臣の^{くりはら のぶみつ}栗原信充（1794～1870）に学ぶことになった。啓四郎は、足かけ六年、江戸に滞在し、弘化4年（1847）に鹿児島に戻った。上滑川の末川近江の屋敷の前の土地（現在の長田町5番地付近、360坪）に設立された甲冑製造所で、啓四郎は武具の製造の陣頭指揮を執ることになるのである。



島津齊彬（1809～58）は、曾祖父の島津重豪、祖父の島津齊興の時代の編纂事業に倣い、啓四郎らに島津領国内の文化財の悉皆調査を行わせた。

その淵源は、寛政の改革を主導した老中松平定信（1759～1829）が編纂させた文化財調査の図録『集古十種』（寛政12年〈1800〉刊）に求めることができる。谷文晁（絵師）、屋代弘賢（幕府奥右筆）、柴野栗山（儒者）らに命じて、文化財の調査を行わせ、正確に写し取った図録を上梓したものである。

安政3年（1856）から同5年にかけて啓四郎は、細工所の絵師を伴って、島津家領国内を巡回、各地の古器（書画・陶器・甲冑・刀剣・弓矢など）を調査し、真写図を作成して回った。木脇家文書の〔兜図集冊〕から窺える主な巡回地域は、大隅国の内之浦・高山・串良（柏原）・国分・蒲生、日向国の都城・高岡・穆佐、北薩の大口・出水・阿久根、南薩の加世田および桜島などであり、鹿児島から遠い地域から調査が開始されたことが看守される。藩主齊彬の急死によって、集められた絵図の出版はかなわなかった。



薩摩藩版の製作

啓四郎は、師の栗原信充の著作を上梓し、広く世に知らしめようと思い立った。当初は、栗原信充の『^{りやうのこうぎ}令講義』『^{しよくげんしやうしき}職原鈔私記』の出版を加治木島津家に依頼をしたらしい。しかし、尊皇の立場をとるこれらの著作の出版は、幕府に対して遠慮ありとして断られたため、今度は啓四郎の従弟の中山次左衛門実善を通じて、藩主茂久（後に忠義）の父、島津久光に依頼した。久光は、信充を江戸から呼び寄せ、信充の著作を薩摩藩版として出版することを命じるとともに、久光自身、信充の講義を受けた。啓四郎は信充らを江戸に迎えに行き、元治元年（1864）5月に鹿児島に到着している。

慶応年間に入って、出版事業は本格化する。久光は鹿児島城二の丸の御書院の後方に取調所を設置し、啓四郎、弟子丸弘喬（鹿児島上荒田出身）、江口宗助（暁帆）、中島白圭（信徴）らに上記著作の編集を行わせたのであった。この他、「天の逆鉾図」「小林郷陰陽石図」といった一枚刷も作成され、頒布された。これらには啓四郎の描いた絵が載せられている。



明治維新の一年前、慶応3年（1867）にパリで開催された万国博覧会に、薩摩藩が、幕府とは別に「薩摩太守政府」として展示を行ったことは有名な話である。実は、このパリ万博の出品物の中に、啓四郎が代表を務める甲冑製作所で作られたと思われる鎧が出品されていた。パリ万博のフランス側の資料によると、出品品目について

「KINOAKI KEISIRO, fournisseur de la Cour, à Kagoshima. - Armures défensives」（きのあき けいしろう 宮廷出入り商人 鹿児島 甲冑—訳は引用者）とある（「1867年パリ万国博と薩摩覚書」『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』第9号）。

明治初年における啓四郎の動きについてはやや曖昧な点があるが、明治5、6年頃、博覧会事務局に出仕したのは確実で、当時、博覧会事務局には薩摩藩出身の町田久成（1838～97）がウィーン万博の準備に当たるとともに、博物館建設の構想を練っており、町田が早くから面識があった啓四郎を東京に呼び寄せたものと推測される。

啓四郎は、明治5年4月11日から5月23日まで、都城県と美々津県（現在のほぼ宮崎県に相当する地域）の産物調査を、江夏干城、江口親雄（暁帆）、弟子丸弘喬とともに行った。その成果は『日隅薩巡回採摘品彙^{てきひん}麁^{いそ}図』（明治5年成、東京国立博物館蔵）として江夏干城の手でまとめられた。江夏を除いて島津久光が藩版製作のために集めた人物と重なることが注目される。



『薩隅煙草録』

青江秀著 明治14年(1881)刊

……農商務課長青江秀といふ有。此人、煙草録を書れたるが、拙者へ真図を書呉候様、無^{よんどころなく}扨被相頼候に付、国分、出水、指宿江差越取調の上、上梓被成、一冊五(円)位ヅツにて、日本中は勿論、西洋各国迄も配分相成候由にて、拙者へも骨折せしとて一冊給りたり。今現存す。 —『萬留』—

本書は、明治政府の勸農政策を背景に、明治11年(1878)に県令岩村通俊^{いわむら みちとし}の命で、鹿児島県勸業課臨時取調掛の青江秀(1834~90)によって編纂が開始され、明治14年に鹿児島県蔵版として刊行された。革装洋装本、696頁からなる大著で定価は5円であった。明治15年時、鹿児島県三等属の白野夏雲の月給が45円、同17年時加治木郡役所御用掛であった啓四郎の月給が8円であることを考えると相当高額であったことがわかる。

本書は、国分、出水、指宿を中心とする鹿児島県下の煙草生産地の記録であり、明治初期の煙草の生産、流通および当時の農業事情に関する重要資料であるとともに、初刊本の用紙、印刷は日本の製紙、印刷史のうえでも貴重な資料とされる。啓四郎は、随所に配してある彩色の挿絵、全156図を担当している。



げいかい ぎよふ
『魔海魚譜』

明治16年〈1883〉刊 鹿児島県刊

同課長白野夏雲といふ人、魚類の真写を依頼に付、書方
いたし候処、すべて是を額にして目今興業館内にかかげられり。
予がかたみなり。 —『萬留』—

『魔海魚譜』は、勸業促進を目的として、
鹿児島県勸業課の白野夏雲のもと編纂され
たもので、絵は木脇啓四郎と二木直喜の2
名が担当した。明治16年（1883）に東京
上野で開催された第1回水産博覧会に出品
され、『魔海魚譜』を含む6点の出品物に
対し、図書類の審査結果で最も高い評価で
ある3等賞状が与えられた。「魔」とは鹿
児島のことで、鹿児島湾に生息する海洋生
物を写実的に描く。肉筆彩色本のほか、モ
ノクロの銅版の刊本（和装本）も作成され、
博覧会に出品された。また、鹿児島では興
業館（現在の鹿児島県立博物館の西隣の建
物）に額に入れられ展示されていた。

今回、本展に展示している鹿児島県立図
書館所蔵の肉筆彩色本『魔海魚譜』は、縦
29.5 c m、横39.6 c mの画帖3冊で、その
中に収められた344図には生き生きとした
美しい彩色がほどこされ、画師の気魄がこ
もった、単なる博物図を越えた美術作品と
いえるものになっている。



啓四郎と沖縄・奄美

啓四郎は、明治19年（1886）から6年間、沖縄県泉崎村古波蔵こはぐらの農事試験場（明治14年設立、国費経営）に勤務する（啓四郎70歳～75歳）。当時の沖縄県知事は鹿児島出身の大迫貞清おおさき だいきよであり、沖縄県勧業課には旧知の田代安定たしろ やすきたがいた。一方、息子の藤次郎も、明治16年と明治30年前後数年ずつ沖縄に滞在し、日記や風景写真を残しており、木脇家にとって沖縄との縁は深い。

沖縄県勧業課課長の石澤兵吾いしざわ ひょうご（1853～1919）は、啓四郎へ、勧業振興や博覧会に関わる『琉球漆器考』や『花草類真写図』などの琉球産物絵図の作成を依頼している。

一方、奄美との関わりについては、明治18年（1885）夏頃に、名越左源太なごや さげんたがまとめた『南島雑話』の写本を、鹿児島県少書記と奄美大島金久支庁長を兼務する新納中三の依頼を受け作成している（22年6月完成）。

明治24（1891）年春に6年間勤めた沖縄農事試験場を退職した啓四郎は、その年の5月に、田代安定たしろ やすきたと共に大島巡回に同行し奄美へ出向いている。

啓四郎が沖縄・奄美に残した足跡はかなり大きいといえるだろう。



慶長之役合戦図屏風の復元

尚古集成館蔵「慶長之役合戦図屏風」は六曲一双の屏風に、豊臣秀吉による朝鮮出兵のうち慶長3年の泗川城塞における島津軍奮戦の様子を描いたもので、狩野派の絵師中島信徴（1836～1906）の制作になる。信徴の箱書によると、本図はもと明治24年（1891）に島津忠義の命によって木脇啓四郎に西南戦争で失われた島津家久由来になる同画題の屏風を新たに描かせようとしたものであるが、同25年9月に啓四郎が眼を患ったため、信徴が後の制作を引き継ぎ、同36年12月に完成させた。また、啓四郎の書き留めによると、啓四郎は明治24年11月に花岡島津家伝来の同屏風を写すことを思い立ち磯邸に伺ったところ筆写を命じられる。一通り完成するも右目を痛めたため、後を信徴に任せたとある。

「慶長之役合戦図屏風」は島津家の武勲と歴史を後世に伝えるための重要なモチーフを絵画化したものであり、同画題は基本的な構図を踏襲しながら、木村探元や永井慶竺という薩摩藩を代表する優れた絵師によって描き継がれてきたのである。

啓四郎がそのような屏風の模写を行った意義は、自然と理解されるだろう。



桜谷の景観と 磯天神拝殿の格天井百草図の復元

鹿児島市吉野町にある菅原神社（磯天神）は、二代藩主光久の創建と伝える古社である。

同社の南の谷は、古来「桜谷」と呼ばれ、桜の名所として文人墨客に親しまれていた。ところが、幕末、桜島沖の神瀬^{かんせ}に砲台を建設するため、同地の土砂が使われたため、同地は往時の景観を失っていた。それを憂えた啓四郎は、社掌の平田彦五郎の協力を得て、桜・楓の植樹を行い、同地の公園化を模索した。そのきっかけとなったのが明治26年（1893）7月の北白川宮能久親王の磯邸訪問であったという。南朝勳員であった啓四郎は、後醍醐天皇の遥拝所の建築を思い立ち、和歌山県吉野の如意輪寺に同所の桜樹と後醍醐天皇の御影を依頼する。遥拝所は実現しなかったようだが、啓四郎76歳、老いて猶精力的な活動を続けたことが知られる。同じころ、傷みの激しかった同社の拝殿の格天井の植物図（百草図）の修復をしたのも啓四郎であった。



啓四郎と和歌

松元治右衛門時直（1818～？）は、啓四郎と同じ上荒田郷中で鹿児島独特の地域教育を受けた、啓四郎の幼馴染である。

『萬留』に「時直君ハ八田先生の直門人にてよみ方が上手なり」とあるように、薩摩藩の桂園派の歌人、八田^{はった}知^{とも}紀^{のり}（喜左衛門、1799～1873）の門人であった。啓四郎とは上荒田郷中の1年後輩に当たるが、和歌に関しては一步進んでいたようで、啓四郎に和歌の世界を知るきっかけを作った人物であった。啓四郎は『萬留』で上荒田出身の川上甚右衛門（親厚）の名を挙げ、歌の添削を受けたことを述べている（川上の師は公家の外山光実）。

『萬留』には、十七八歳の頃のこととして、夕暮れ時から日の出時まで夜を徹して、百首以上の和歌を題に従って速詠した経験を述べている。老年になっても、同好の仲間が日を決めて毎月集まり、歌会を催していた。

鹿児島の歌壇は、高崎正風や黒田清綱など宮中の御歌所の歌人たちと強い繋がりを保っており、川畑梓、山口利雄らが中心となって明治後期まで定期的に編まれていた『鹿児島歌会』（明治35年の23輯まで確認できる）には、鹿児島の歌人に交じって啓四郎や木脇祐治らの歌が収録されている。



『日隅薩巡回採摘品彙図』

明治5年(1872)成、東京国立博物館蔵

本書は、大本（縦26.8cm、横19.6cm）5冊からなり、表題には「日隅薩」とあるが、主に日向国を巡回しながら、風景や動植物、古遺物を調査し、その図を写生、浄書したものを編集したものである。各図には日付や採取（写生）場所、土地の名称（方言）や色註などの留書が添えられている。これにより巡回した時期や経路、関係した人物などの情報が得られる。巡回した人物で明らかなのは、木脇啓四郎、江夏干城、江口親雄（暁帆）、弟子丸弘喬の4人で、また巡回した期間は、明治5年（1872）4月10日から5月23日頃であったと推測される。

調査目的や編者名などが具体的に書かれておらず、その詳細については課題がのこるが、「彙図」とあるように、最終的な巡回の報告書とは考えにくく、報告書作成にあたっての控えにあたるものと思われる。最終的な報告書はウィーン万国博覧会の関係資料や、草創期の博物館の収蔵展示品の資料として作成されたものと考えられる。

